の跡に接しても、唯強く握締めて拜する外に爲すを知らざる者に有之候。去乍ら、この
皇國に芽生え育くまれし藝術の第一等とも申すべき義大夫淨瑠璃の、兎角影薄れ行く樣は常々殘念に存居候處、況して父上樣との關係の甚ならぬを思へば、解し得ずとは申せ、斯道の發展を衷心より冀幾する一人に御座候。

大日本は神國に御座候。父上の御靈は西方淨土にも、彼方天國にも在らず、先賢諸靈と共に凡眼に見えずと雖も嚴として此土にとどまり、御自身は益々御精進、御切磋あり、我等遺族には深き慈愛と强き激勵の鞭とを以て御注視の事と確信仕候。

肉身六十年の波瀾多き御生涯を閉ぢ、今は善き惡きの境明かに、直なる者のみ榮ゆる世に入られし父上の御靈の前に再拜して誓ひ奉る。

頑兒の身は總べて
皇國の御爲に獻じ奉る可く候。肉身の生命は長きを以て尊しとせず、短きを以て卑しとせず、聽ては御傍に參じ、尊き、神國護持の魂として永遠の切磋に碎身可仕候。

さらば、御形見の時計を腕に、御形見の服を纏ひ、御形見の靴を穿ちて渡滿仕らん。生前の御鞭撻の彌々嚴に、一途に皇國臣民の道を歩ましめ給へ。再拜。

（皇紀二千六百年八月四日）

森下氏と私

本誌同人　太宰施門

森下氏の有つて居られた色いろのもの、殆んど外に掛けがへの無い知識や趣味や教養やを少しづつ我々の方にも廻して一いただいて、ボツ〳〵仕事をまとめて行きたい願ひ、それが完全に、また急に裏切られてしまひました。餘りに意外にも氏は臥床二週目で、それも些とも私の知らない間に逝くなられました。

私どもの毎日會ひ、話ししてゐる人達とは全然タイプの違つた森下氏は、極めて熱のある、活動力に溢れ切つてゐる人のやうに思はれました。義大夫が語れ、またそれを深く味はふ人としての氏と、この二つは別の違つた存在のやうでしたそれが「淨瑠璃雜誌」で一しよになり、極めて意義の大きい仕事に氏は手を著けられました。去年の秋以後の事でした。

昭和二、三年頃お目にかかり、以後途絶えてゐた維がりが急に密接になつて來ました。しげしげお目にもかかり、色々互ひの事を賴んだり賴まれたり。私の方は大して骨の折れない、むしろ愉快な仕事が多かつたのですが、氏の方では相當面倒な、厄介な事柄を引受けられて、隨分困られたやうにも

思へました。しかしちやんとそれも見事に仕上げて、私も關係した大きい仕事をやり了ふせ、皆なをアツと言はせました。それはこの雜誌にも記事の出てゐた、京都帝大での古觀大夫以下の出演です。

この催ほしの如何に盛んであつたか、演出が何れほど藝術的であつたかは、矢張り事に當つて骨を折られた武智鐵二氏の記錄（「劇評」所載）にも見えてゐます。その後何度となく「義大夫とはこんなに面白いものとは知らなかつた」、「全く感激しました」、「今までは唯はず嫌ひでした」、「これからは毎月文樂に行きます」などの斷れぎれの談片を若い學徒の口から私は聞きます。この感情の將來へ傳はる波動はずゐ分大きいと思はれます。絕大だと言つてよいかも知れません。そしてそれらの一切の源、橋渡しから段取りは全部森下氏がせられたのです。然も全然厚意と、氏の藝術に寄せる熱とがさせた業です。私の深い感謝はむろん當然の事ですが、言はばそれは私的のもの、廣く義大夫界の殘らずが氏に心から禮を言ふべき筋合ひのものだと私は思ひます。

「淨瑠璃雜誌」を通じての氏の仕事、これからなほやつて行かうと思はれた計劃については、それらについて私よりもよく知つてゐる人、よく適當な人が居られませうからそれは申しません。が義大夫について氏から得た知識や鑑賞態度の反省など、小さくない利益を受けたことを告白するのは私の義務だと思ひます。

森下氏はほんたうの意味で、日本で初めて義大夫界に批評を入れようとせられました。書かれたもの一々を私は愛讀し、また讃讀しました。しかしそれ以上の色々のことを、ずゐ分どつさり深刻に私は氏の口から聞きました。

誰にでもさうでありませうが、私にはその悉くが今ほんたうに寶のやうに貴重に思はれます。と言つて氏の蘊蓄は無盡藏です。我々はそのほんの一小部分をお裾分けにあづかつたといふに過ぎません。しかしそれでも測られない利益を同氏から私は得て居ります。

もとより氏と私とは行く道を異にして居ります。それだけ同氏に訊し、教へていただきたい事がまだ澤山あつたのですが、一朝にして幽明境を別けることになりました。知の世界でも感情の世界でも、大切のものをもぎ取られたやうに思ひます。この損失はとても取り返すことは出來ないでせう。同じことを若し心があれば、我が國の全義大夫界は慨くであらうと思ひます。

折角大業の半ばで逝かれた同氏にも、少くない心殘りがこの點に置かれてゐるではないでせうか。

（七月二十二日）